

## 東北でのディアコニア実習のまとめ

フロイラン マルタ

今秋10月から11月にかけての約1ヶ月間、東北でディアコニア（教会の社会福祉活動）の実習をさせていただく機会に恵まれました。震災当初から支援をしてこられた方々や被災された方々と出会い、様々なお話を聞き、現場を見ることによって多くのことを学ばせていただきました。クリスチャンの支援者に留まらず、多宗教で協力して行われているプロジェクトについても学ぶ機会をいただき、多くの初めての体験をしました。とても内容の濃い充実した1ヶ月でした。この実習を実現させてくださった中澤竜生先生ご夫妻、川上直哉先生、ディーン・ベンソン先生ご夫妻に心から感謝しています。

活動に参加させていただいたのは、主に南三陸、石巻、福島の3箇所でした。中澤先生が震災当初から支援してこられた南三陸では、仮設にまだ住んでいらっしゃる方と、復興住宅に最近引越しをした方、両方のお話を聞くことができました。中澤先生は「支援者」というよりは、「お友達」として被災者と接し、その方々と共に過ごす時を楽しんでいらっしゃるという印象を受けました。そのような雰囲気の中で、被災された方々はオープンに困っていることや悩んでいることを話されます。長期にわたって築いてこられた信頼関係があるからこそ、中澤先生は被災者にとって「相談したい相手」となっているのではないかと、そのような「寄り添う支援」の形を見ることができました。次々に復興住宅への入居が始まっており、震災から5年目でようやく“普通”の生活に戻れる兆しが見えてきているのだな、と感じました。もちろん環境の変化に慣れていくのはまだこれからで、課題が多く残されていることも事実ですが、ようやく仮設から出られることに安堵された方のお話が私にとっては印象的でした。

石巻ではベンソン先生ご夫妻が立ち上げた“希望の家”でしばらく滞在し、地域の方々と様々な交流ができました。この地域は津波被害に見舞われましたが、多くの方は自宅が残り、そこに今も住み続けておられます。震災を地域全体で乗り越えて、今も仲良くお互いを支え合いながら生活されている姿がありました。そのような、一見特に問題がなくもう支援を必要としていない地域において、ディアコニアの役割とは何なのでしょう。物質的な必要が満たされれば支援は終わるのでしょうか。家が綺麗に片付けられ、生活に困らなくなったとしても、震災が与えた心のダメージは人それぞれではありますが、深く残っている場合もあるでしょう。物質的な支援だけがディアコニアなのではなく、心のケア、霊的なケアもディアコニアの大切な一部です。また、外見上では何も問題なさそうに見えても、その地域を知ってい

2016年12月15日

けばいくほど、引きこもりやうつ病といった、隠れた問題が見えていきます。ペンソン先生は、もともと教会がなく、神様や聖書の話の聞いたことがなかったその地域の方々に神様の愛を伝えるべく、希望の家で様々な企画をされています。ただ、そういった人との関わりの上で問題を抱えている方ほど、いくら企画を用意してもなかなか外に出てこれないのが現状のようです。そういった方々とどのようにコンタクトを取ったら良いのか、それは被災地だけでなく、どこの地域にも言える課題なのではないでしょうか。石巻で震災後に始まった物質的支援が、それだけに留まらずに心や霊的なケアへと繋がっているのを見ることができました。

そして、私にとってこの実習で最も辛く、大きな衝撃を受けたのは福島訪問でした。福島に足を運ぶのは震災後初めてでした。勉強不足の私は正直なところ、本当の福島の状況や原子力問題についてよく把握していませんでした。川上先生の解説や、現地の方々のお話から見えてきた現実はとても受け入れ難いものでした。郡山市にある公園で、無防備で無邪気に遊ぶ子どもたちの光景は、いたって普通のどこにもあるようなものです。しかし、普通ではなかったのが放射線量。目に見えない危険は、忘れようと努めれば忘れた気になれるものなのかもしれません。そして、そのようにして生きていくことが、そのような状況下ではあまり悪くない選択肢なのかもしれません。何が本当で何が嘘なのか、何が安全で何が危険なのか分からない状況の中で、それでもそこで生活せざるを得ない方々の心労は計り知れません。

愛だったり優しさだったり、私は今まで人間の良い部分にたくさん触れて生きてきました。それはとても恵まれていて感謝していることなのですが、この世界の現実を突きつけられるとき、その現実をどう理解したらいいのか、頭の中でなかなか整理が付きませんでした。人間には残酷な面もあるんだ、そしてそれは人間の本質でもあるのかもしれないと思う時、自分自身も同じ人間なので、状況を誰かのせいにすることもできないのだな、と感じました。できるものならもうこれ以上知りたくない、明るい愛の溢れる世界だけを見つめて生きていたい、と無責任にも思ってしまいます。明るい世界だけで生きていける人はその選択肢もあるのかもしれませんが。ただ、世界には人間の残酷さ故、暗闇と隣り合わせで生きている人たちがいるのも事実なのです。その人たちに愛を分け与えることができるのは、真実の愛を知っている人なのではないでしょうか。そしてその真実の愛とは、神様からくるのだと、私は信じています。まだ福島で知った現実を受けて、具体的に自分に何ができるのかということは模索中ですが、自分の人生で与えられている目の前の一人の人を大切にすること、それが今私に確実にできることなのではないかと思います。神様や周りの方々、育った環境からたくさん良いものを受けて生きてきた私には、少しで

2016年12月15日

も社会が明るい場所になるために召されているのではないかと思います。神様の愛を行いによって伝えていくディアコニア。これからも神様と共に、その道を歩んでいきたいです。